発達 2081

幼児の主観的世界・外的活動と仲間関係 3
声の質から幼児の感情を見る

須田治
（東京都立大学人文文学部）

○西澤弘行
（東京都立大学人文科学研究所）

目的
これまで我々は、幼児が仲間関係を形成し、維持していく力・力を「仲間との交渉過程における感情を調整する働き」として定式化し、この「力」が異なる社会的文脈の中でどのような発達をするのかを、個人を単位として記述することを目的として、教育理念・実践において異なる質を持つ2つの幼稚園を選び、子ども個人ごとに9つの方法で記述をおこなってきた。

この中でとくに焦点化されてきた領域のひとつは、対人交渉の場面で、ことばを用いることと感情を調整していくことの双方に同時にかかわる「感情－言語システム」の発達である。これについて、欲求不満シーンを描いた「Fカード」についての話作りの内容分析によって、発話の内容の面にあらわれる特徴については2つの幼稚園の間に特徴的な差違があることが判った。

今回注目したのは、内容ともに発話のもうひとつの重要な成分であると考えられる、「声の質・調子にみられる感情の成分」である。
これに類する研究としては、成人話者におけるイントネーション・パタンの認知的説明なしでインテーションと表現意図の表現において、同じく成人話者における発声（phonation）・プロソディーと感情・感情の関係についての研究（この中には、精神医療にかける診断への応用も含まれる）、マザーリーズの音響特徴についての研究、発音言語から1語文期の乳児の発声のプロソディーと感情・表現意図の関係についての研究などがあげられる。これに対して本研究は以下のような特徴を持つ。

① 上述の諸研究では扱われていない幼児を対象とする。

② 上述の諸研究では、機器による音響的・物理的パラメータによる記述が中心を成しているのに対し、心理的・感覚／認知的パラメータを中心とした記述をおこなう。

③ 情緒、感情、表現意図などのうち、情緒のみ、しかもその基本的な成分に限定して記述をおこなう。